

彝族の祭司「畢摩」について

On the Priest “Bimo” of the Yi People

華東理工大学教授

張 正軍 CHO, Seigun

中国では、彝族は人口が8714393人もいる少数民族である（2010年の国勢調査による）。主に雲南省、四川省、貴州省、広西壮族自治区などに分布している。雲南省楚雄彝族自治州と紅河哈尼族彝族自治州、四川省涼山彝族自治州は彝族の最も集中しているところである。畢摩は神から予言能力を与えられ、神との交信によって祭祀、託宣、占いや治療などをする彝族の原始宗教の祭司である。畢とは祭祀の際、呪文を唱えることであり、摩とは長老、大師を意味する。歴史上の漢文書籍には鬼主、鬼師、白馬、貝瑪、奚波、西坂、倭卜、覲幡、耆老、白莫、比姆、比目、畢母、布幕、唄耆、阿畢、必磨、白末、鷄莫、白毛などの漢語に訳され、いずれ漢語の当て字である。今は畢摩という表記に定着している。畢摩たちは彝族文字か漢語の音仮名で表記したさまざまな経典を持っていて、天文、暦法（十ヶ月暦）、神話、信仰などの古典文化を保存してきた担い手である。祖先祭祀、占い、天文、医術、神話などに精通し、彝族の文化遺産を伝承する役割を果たしている。神話などを唱えることにより、人々に倫理道徳や道理などを諭し教え、部族の調和を維持する。彝族社会では、特に農村では生活全般において畢摩に頼っている。したがって、畢摩のことを理解しないと、彝族文化を理解することができないとも言えよう。

私は雲南省楚雄彝族自治州、四川省涼山彝族自治州の畢摩に何度も聞き書き¹⁾をしたことがある。本文はそれらのフィールドワークに基づいて、文献を参考にしながら、畢摩の起源と後継ぎ、神器、経典、祭儀に焦点を置いて、民俗文化の視点から考察を試みたい。

1. 畢摩の起源と後継ぎ

畢摩の起源についてはいくつかの説がある。徐銘は「畢摩は直接に上古の蘇尼に由来する。蘇尼は母系社会に生まれ、上古の蘇尼はその後に出てきた畢摩に通じる」と言い、何耀華は畢摩は父系社会の酋長に由来すると指摘した²⁾。曲木約質は、母系社会の晩期に女性の畢摩は男性の畢摩に変わったと論じた³⁾。勿論、母系或いは父系社会の祭司は今の畢摩と同じだとは言えない。畢摩の経典「家の糸譜」によると、彝族の先祖武乍の第21代の孫である居日尼尼が天から降りて初めて、世間の何事もうまく行ったそうだ。居日尼尼は最初の畢摩だと言われている。一方、伝説により、阿蘇拉則は大・小涼山の彝族の畢摩の始祖で、彝族文化の発達に大きな貢献をした人物であるという。創世神話の「勒俄特依」は阿蘇拉則が当時民間に伝わっている史詩を元にしてまとめたものだと言っている。

晋・常璩『華陽国誌・南中誌』には「夷人大種曰昆，小種曰叟……夷中有桀黠能言議屈服種人者，謂之耆老，便為主，論議好譬喻物，謂之夷經」と記載されている。その意味は次のとおり：夷人の中で人口が多いのは昆明族，人口が少ないのは叟族という。…夷人の中で賢くて話がうまく，同族を説得できるのは耆老という。その人を主人にする。議論するにはよく物で譬える。それは夷經という。『華陽国誌』でいう南中は中国南西地域の雲南省，貴州省と四川省を指す。夷人とは弓を背負って獣を捕る獵師である。昆明族も叟族も南北朝時代を経て唐代には烏蛮になった。その烏蛮は彝族の先祖である。この文献から見れば，遅くとも三国時代にはもう耆老（畢摩）のような人物がいて，經典もあったと思われる。

唐・樊綽は『蛮書』に東爨烏蛮⁴⁾のことに、「大部落則有大鬼主，百家二百家小部落，亦有小鬼主」と記載した。それは大部落には大鬼主があり，百戸や二百戸のような小部落にも小鬼主があるという意味である。

また、『宋史・黎州諸蛮伝』には「夷俗尚鬼，謂主祭者曰鬼主，故酋長号都鬼主」と記載され，それは，夷人の風習は鬼を尊び，祭司を鬼主と言い，故に酋長を都鬼主と言うことである。その時代の酋長（鬼主）は行政権も祭祀権も一身に集めていた。

元・明・清の時代に，中央政府は彝族社会に土司⁵⁾制度を実行した。茲（長男＝君王），莫（次男＝大臣），畢（三男＝先生）は彝族の支配階級になった。その時代の畢摩は祖先祭祀を仕事とした黒彝族（奴隸主）であった。彼らは彝族語で經典をたくさん書き，畢摩文化が盛んになった。畢摩は茲と莫の下で，補佐役を務め，戦争においては勝負の占いをし，軍師となり，平日は天体観測をし，曆を作成し，農事なども指導していた。

清の末，雍正年間に，朝廷は土司制度を止めて，地方長官を任命することになった。畢摩は政治の補佐役から専門の宗教祭司になった。また，畢摩が人のために祖先祭祀をしたり，邪気祓いをしたりするのは貴族階級（黒彝族）の威厳に損すると思われる，一部の畢摩は著書に投入し，一部の仕事

を白彝族の人に担当させた。今，実際には黒彝族出身の畢摩の人数はとても少ない。因みに，黒彝族と白彝族との畢摩はともに儀式を主催する場合には黒彝族のほうが位が高いと思われる。

以上，まとめて言うと，宋の時代の前は畢摩文化の確立期であり，畢摩は政治，宗教，軍事権を一身にした部族の酋長であった。元から清の雍正年間までの土司摂政時代には，畢摩は土司に政治などの補佐をしながら主に祖先祭祀をしてきた。これは畢摩文化の繁栄期であった。清の雍正年間に入り，土司制度が廃止された後，畢摩は普通の百姓になった。

ところで，畢摩の後継ぎについては大きく二つの系統に分かれる。一つは世襲であり，もう一つは親が畢摩でなく，他の畢摩に教わってもらうのである。しかし，世襲の畢摩でないで，自分の祖先には畢摩がいないので，守ってくれないから，方術が上手でもあまり叶わないと思われる。世襲の畢摩は親から代々受け継いできた神器や經典などを持っていて，祖先である畢摩に守られるから，行事の成功率は100%だと信じられている。雲南の小涼山（寧蒗県）では，伝統的には親の畢摩は長男か末の息子に教えて，次男には教えないそうだ。しかし，四川省の大涼山美姑県拖木郷苦夥莫村の大畢摩曲比拉果は4人の息子みんなに教えている。畢摩の術を習う弟子は親子でない場合には入門の際，先生にお酒やお肉を送り，ふだんは先生の家に住み込み，野良仕事などを手伝う。夜には彝族文字などを習い，お経を唱える。先生が祭祀などに招かれる際，弟子と一緒に行って，手伝いをする。普通は4，5年修行すると，卒業できて，一人で儀式の主催ができる。經典は卒業する前に先生の本をもとにして自分で写すのである。

畢摩は男子にしか後継ぎできない。私は2000年9月17日に四川省美姑県拉馬阿覚郷核馬村を訪ねた。その村の住民は35戸あり，そのうち32戸には畢摩がいる（畢摩が多い家には4人もいる）という。残りの3戸には後継ぎできる男子がいないので，畢摩がいないわけである。でも，美姑県畢摩文化研究センター所属の案内者摩瑟磁火氏に

よると、村によっては女性の畢摩もいて、巫術が上手であれば、やはり村人に招かれるそうだ。でも、女性の畢摩がいても、人数がわずかで、私は出会ったことがない。

畢摩になると、いろいろなタブーがある。巴莫阿依の研究⁶⁾によってまとめてみると、次のような畢摩は祖先祭祀をしてはいけないそうだ。

- (1) 本人或いは家族の人が腋臭、ハンセン病にかかっている畢摩；
- (2) 怪我をしたり体のどこか不自由になっている畢摩；
- (3) 歯が抜けた年寄りの畢摩；
- (4) 生育能力がない畢摩；
- (5) 虎、熊、犬、蛇、猫、農耕用の牛の肉を食べた畢摩；
- (6) 強盗やてごめをしたことのある畢摩；
- (7) 畢摩でありながら、蘇尼のように鬼祓いもする畢摩；
- (8) 祖先と干支が合わない畢摩；

それ以外にもいくつかのタブーがある。例えば、女性が畢摩の行事用の神器に触ってはいけない。畢摩が神枝（地面に挿した木の枝）を間違えて挿してはいけない。間違ったら、主人の家の人にも畢摩本人にも災いを及ぼすと言われている。畢摩は行事を頼まれると、拒否してはいけない。お客さんが持ってきたお酒を畢摩の守り神に供えてから初めて、神器や経典などを取って祭祀に出かけることができる。畢摩は女性のスカートの下を通ってはいけない。女性の生理の血や犬と猫の血を見てはいけない。

2. 畢摩の神器

畢摩の神器とは畢摩が儀式を行う際に使われる道具である。神様を招いて、邪気を祓う役割がある。具体的にいうと、神笠、神鈴、籤筒、神籤、神団扇などがある。『頌畢祖経』（畢摩の祖先を称える経典）には神笠、神鈴、籤筒、神籤は天から降りて、彝族の祖先チュブアルが最初に使ったと記載されている。初めてのスツストの時代から、ニューニューの時代とグォの時代を経て、モンの

時代までは畢摩が儀式を上手に主催できなかった。手か足か耳がない不具者の人間ばかりが生まれた。チュブアルの時代に入って、大畢摩は先述した神器をうまく使って、祖先を祭祀する儀式をちゃんと行くと、健康な人間が生まれ育つようになった。そのわけで畢摩は儀式を行う際、先述した神器を持つべきである。2000年9月四川省の美姑県でフィールドワークをした時に聞いた話だが、同県の畢摩文化研究センターに所属する畢摩曲比尔日（先述した大畢摩曲比拉果の長男、1968年生まれ）は北京の中央民族大学で研修した時、神鈴を持って行かなかったから、変な病気にかかった。家に電話して神鈴を北京に持って行ったら、病気が治ったそうだ。つまり、神聖なる道具を持って行かないと、畢摩自身にも災いを及ぼすということである。

次に畢摩の神器を紹介する。

(1) 神笠：彝族語では「ピロボ」という。畢摩が儀式の際、被っている笠である。竹編みに黒いフェルトを敷いて作ったものである。笠から細長く黒い帯が垂れていて、その下に鷹の爪が締められている。

(2) 神鈴：彝族語では「ビニ」或いは「ヅル」という。畢摩は儀式の際、神鈴（銅製の鈴）を鳴らして神様を招いて、鬼を祓う。最初にはお経を唱える時の伴奏楽器にすぎなく、後に聖なる物になったと思う。普通は漢族地域から買ってきたそうだ。儀式の際、持って行くべきで、普通は靈魂の呼び戻しや送りに使われている。

(3) 籤筒：彝族語では「ズト」という。占いに使うめどきが入っている円筒である。一部の行事には、畢摩はそれをお守りとして持って行く。筒の長さはそれぞれ違う。普通は畢摩の前肘の長さと同じである。長すぎると、持ちにくいので、儀式を間違えるおそれがある。短すぎると、神通力が足りないと思われる。上の部分は柏公、下の部分は桜母という。中に入っているめどきは竹か木を削って作ったものである。先端が叉の形になっているのは陰で、一方だけが尖っているのは陽である。普通は18本か11本のめどきが入っている。占いの時、それらを三つに分けて奇数か偶

数かで吉凶を決める。

(4) 神団扇：彝族語では「タト」という。それは死者の靈魂をあの世に送る際に使うものである。非常死の靈魂をあの世に送る際には九つの四方形のある団扇で送る。正常死の靈魂を送る際には七つの四方形のある団扇で送る。銅製の団扇はハンセン病で死んだ人の靈魂を送る際に使われている。桜の木で作った柄を竹編みの団扇に挟んで、柄の上には鷹、虎、蛙が刻まれている。創世神話「勐俄特依」には、鷹の三粒の血が彝族の娘のスカートに落ちて、彼女が妊娠して、英雄の支格阿龍が生まれたという。また、同神話には蛙は人間に賢くなる水と愚かになる水を飲み分けることを教えた智者の存在であった。鷹も虎も蛙も畢摩が儀式を行う時、鬼祓いを助けてくれる存在である。団扇の取っ手には靈魂の休憩の場（水を飲む場でもある）、東西南北、天を支える四本の銅鉄柱が刻んである。

以上は畢摩がよく使っている道具である。その他、竹鳴らしや經典と道具入れの網袋などがある。それらの道具は畢摩自身か専門の職人が縁起の良い日に作ったものである。道具が古ければ古いほど神通力が強いと思われる。

3. 經典

畢摩の經典は16世紀に雲南省の武定と貴州省の畢節地域を源に大量に書かれ、彝族の遷移に従ってだんだん四方に伝わったものである。今の經典は右から左へ横に書く物と左から右へ縦に書く物と二つの表記方法がある。死者の靈魂をあの世に送る際に使われる經典は昼間に使うから字が小さい。呪いなど夜間に使われる經典は字が大きい。經典が古くなると、改めて書き写してから、古い經典を焼いてしまう。基本的には經典は彝族文字で記録するが、私が調査した雲南省禄豊県高峰郷と同省双柏県法標郷の一部の畢摩は漢語の当て字で彝族語の音を記録した經典を語っている。つまり、一部の彝族の畢摩はもう彝族文字が書けないのである。その代わりに、漢語が多少分かっているので、「万葉仮名」のような表記法で經典

を記録したのである。また、同省寧蒗県新營盤郷毛家村でサマという畢摩は經典を15部持っているけど、畢摩自身もその意味が分からないのが多い。同県出身で雲南民族大学の彝族学者肖建華教授に訳してもらったが、それでも4部は訳せなかった。そのわけは畢摩の經典が文化大革命の時代に迷信的な物だと言われ、焼かれてしまって、その後畢摩が自分の記憶によって書いたのがほとんどだから、内容が欠けているのが多いようだ。

ちなみに、畢摩の經典の最後の2頁は空白になっている。それはアソラゼという先述した大畢摩についてのエピソードである。伝説によると、少年時代のアソラゼはいつも無口で、朝早く家を出て、夜遅く帰ってきた。その行き先は誰も知らなかった。母親は不思議に思って、息子の跡について見に行ったが、いつも途中で息子の姿を見失ってしまった。ある日、母親は息子の服に糸を結びつけ、その糸をたどって捜した。森に入ると、一匹の猿が木の上で何かをしゃべり、その下では一羽の鳥が黒い血を吐いて、字を書いていた。息子がその側でそれを真似していると見えた。「お前、毎日ここに来て何をしているの」と母親の怒りの声に猿も鳥も逃げってしまった。その後、猿も鳥も二度とそこに現れなかった。アソラゼは仕方なく、經典の最後の二頁を空白にしたまま今まで習ったものをまとめた。アソラゼは畢摩が「請神經」（神を招く經）を唱える際に招いた首席のお守りになっている。歴史上、畢摩の中では、一番力を持っていて、最高の地位を誇る人物である。

今、畢摩の文化が豊富に残っているところは四川省の大涼山だと思う。同省の美姑県彝族文化研究センターの統計により、県民15万人余りに対し、畢摩は約6850人余りいて、經典の数は延べ10万冊余りあり、畢摩は一人当たり經典を16.7部持っているようだ。私が訪ねた大畢摩的惹洛曲と曲比拉果はそれぞれ經典を200部あまり持っているようだ。創世神話「勐俄特依」も經典の一つで、その長さといえば、何と5680句もある⁷⁾。

畢摩が持っている經典の量はそれぞれ違うが、その延べ数は夥しい。大雑把に祭祀經、招魂經、訓世經、史伝、神話、教育經、曆などに分けられ

る。ここでは祖霊を送る經典の系列だけ取り上げて紹介する。

- (1) 祖霊送りの吉凶を判断する儀式に唱える經典
 - ア. 家神に生贄を供える經典（家神が儀式に驚かされて逃げないため）
- (2) 祖霊を送り、鬼を呪う儀式に唱える經典
 - ア. 下痢の予防の經典（下痢で死なれた祖先のために下痢鬼を祓う。その鬼が二度と戻らないように呪われる。）
 - イ. 下痢の由来を唱える經典。
- (3) 祖霊を招き、位牌を作り、穢れを祓う儀式に唱える經典
 - ア. 祖先のお墓の穢れを祓う經典（お墓の穢れを祓い、祖霊を招いて位牌に憑かせる。）
 - イ. 生き物の靈魂を招く經典
 - ウ. 靈魂を下ろす經典（古い位牌を新しい位牌に換えて、祖霊を供養する。）
 - エ. 祖霊の穢れを祓う經典（死んだばかりの祖霊の位牌の穢れを祓う。）
 - オ. 穢れを祓う經典（儀式に使われる道具や生贄や神座の穢れを祓う。）
 - カ. 葉を供える經典（葉草で祖霊の病気を治す。）
 - キ. 下痢の鬼を祓って葬る經典（祖先の命に憑いている下痢の鬼を追い祓って葬る。）
 - ク. 死神の道を塞ぐ經典（今後、命を取られないように死神の来る道を塞ぐ。）
 - ケ. 穢れを下ろす經典（死体を焼く際、それに憑いた穢れを祓う。）
- (4) 殴って殺した家畜を生贄にする儀式に唱える經典
 - ア. 徳古⁸⁾への恨み言を除く經典
 - イ. 罪業を祓う經典（各階層の人々の罪業を祓う。）
 - ウ. 源を遡る經典（祖霊送りの由来を述べる。）
 - エ. 鶏を供える經典（牛肉や山羊の肉を食べない祖霊に鶏を供える。）
 - オ. 生贄を食べる經典（祖霊を慰め、落ち着いて生贄を楽しく食べさせる。）
 - カ. ハンセン病の鬼を予防する經典（生贄を

- ハンセン病の鬼に奪われないように唱える。）
- キ. 鳳凰経、牛を殴って殺す經典、甲冑経（死者には人間界に未練を残さずに早く天に行ってもらうように。死者の子孫を悲しがらないように慰める。）
 - ク. 家畜を供え、靈魂を招く經典（祖霊に家畜を供え、その子孫の靈魂を招いて帰ってもらう。）
 - (5) 穢れを祓う儀式に唱える經典
 - ア. 穢れを祓う經典（これから使う道具の穢れを祓う。）
 - (6) 悪魔を祓う儀式に唱える經典
 - ア. 悪魔を下ろす經典（祖霊に憑いているいろいろな悪魔を下ろして、山羊に運んでもらう。）
 - イ. 悪魔を下ろす經典（付属）（名門の家から来た悪魔を追い祓って、山羊に運んで行ってもらう。）
 - (7) 悪業を祓う儀式に唱える經典
 - ア. 悪業を祓う經典（有名な祖先が人の恨みを買った悪業を祓う。）
 - (8) 位牌を換える儀式に唱える經典
 - ア. 位牌を換える經典（古い位牌を、儀式の始まりに作った新しい位牌に換える。）
 - イ. 祖霊を預ける經典（各氏族の祖霊を預ける崖のことを唱える。）
 - (9) 福の源を探す儀式に唱える經典
 - ア. 源流経（人間が繁栄したのは母の功績だ。）
 - イ. 陽剛経（人間に陽気、繁栄、福をあげる福祿樹を栽培する。）
 - (10) 祖霊を抑える儀式に唱える經典
 - ア. 制止経（祖霊の悪い癖を抑えて、崇りをさせないようにする。）
 - イ. 祖霊の順番を並べる經典（時代が古くなると、位牌が混雑になるおそれがあるので、改めてその順番を並べること。）
 - (11) 位牌を神聖なる筒に集める儀式に唱える經典
 - ア. 祖霊を筒に集めて、穢れを祓う經典
 - イ. 畢摩のお守りに生贄を供える經典（畢摩

のお守りに生贄を供え、ぼろぼろになった
 経典と道具を廃棄する。)

- ウ. 家の神を供養し、福を祈禱する経典
- エ. お酒を勧める経典（祖霊とその子孫にお酒を勧める。)
- オ. 後継ぎの人を祈願する経典（後継ぎの人がいない主人の悪業を祓って、これから子孫が繁栄するようにする。)
- カ. 婚姻経（祖霊の婚姻関係を改めて結び、天で新しく家庭を作る。)

(12) 豚の肩甲骨で占いをする儀式に唱える経典

- ア. 肩甲骨の占いで穢れを祓う経典（神座と生贄と道具の穢れを祓う。)
- イ. 松の葉を取る経典（畢摩のお守りである黒い熊のために食糧を準備する。)
- ウ. 家畜神の経典（畢摩のお守りである家畜神に生贄を供える。)
- エ. 家畜神が生贄を食べる経典
- オ. 獣神に関する経典（畢摩のお守りである獣神をご馳走する。)
- カ. 生贄を食べる経典（畢摩の全てのお守り神を招いてご馳走する。)
- キ. 神座に生贄を供える経典
- ク. 債務を返す経典（人間関係に出た全ての恩讐と悪業の債務を返す。)
- ケ. 肩甲骨で占いをする経典（結核を追い祓い、豚の肩甲骨で祖霊を送った後、主人と畢摩自身の吉凶を占う。)
- コ. 死の原因を求める経典（人間が病気や死になる原因を求める。)
- サ. 神を称える経典（畢摩のお守り神の由来とその業績を唱える。)
- シ. 債務を返済し、体を清める経典（死者一生全ての恩讐と債務を返済し、人間界との縁を切り、体を清めてあげて、祖先のいる天に行ってもらおう。)
- ス. 鶏の骨で占う経典（鶏の骨で祖霊を送った後、畢摩と主人との吉凶を占う。)
- セ. 神様にお茶を供える経典（儀式が終わる時、畢摩のお守り神にお茶を供え、送って

帰す。)

(13) 福を祈願する儀式に唱える経典

- ア. 穢れを祓い、福を祈願する経典（神座と生贄と道具の穢れを祓う際に唱える。)
- イ. 福の神や畢摩の保護神に生贄を供える経典
- ウ. 祖霊に天への道を案内する経典
- エ. 福を招く経典（福の門を開ける獣に主人のために福祿の門を開けてもらう。)

(14) 祖霊を送り、人間界への戻り道を塞ぐ儀式に唱える経典

- ア. 祖霊を探す経典（亡霊を探し、祖霊の預かり所に送って帰す。)
- イ. 悪業を切る経典（主人に憑く全ての悪業の源を切り、それを粉になるまで切ってしまう。)
- ウ. 祖霊を動かす経典（祖霊にあの世への道を案内する。)
- エ. 靈魂を集める経典（ばらばらになった祖霊を集めて、祖先のいる世界へ送る。)
- オ. 同族の人を仲良くさせる経典（共に祖霊を送った後、仲の悪い同族の人々を仲良くさせる。)
- カ. 祖霊が人間界に戻る道を塞ぐ経典
- キ. お茶を供える経典（儀式が終わる時、祖霊と畢摩の保護神にお茶を供える。)

以上の経典は主に死者の靈魂をあの世界に送る際に唱えるものである。したがって、ほとんどは特定の場合にしか唱えられない。その他に、呪い、呪い返し、鬼祓い、靈魂の呼び返し、誓い、ハンセン病、畢摩の守り神の招き、占いに関する経典も多くあるが、紙面に限りがあるため全部の例を挙げるのを遠慮させてもらいたい。

4. 畢摩の祭祀とまじない

畢摩文化の中核は経典と祭祀とまじないだと思う。畢摩が主催する祭祀とまじないはいろいろある。例えば、彝族の人が病気、お葬式、結婚式、新築、春蒔き、貿易、狩猟などの時、畢摩は鶏のお尻と舌と頭との骨、山羊の足の付け根の骨と角、

豚の足の付け根の骨と胆嚢と脾臓、箸、卵、草、松の木などいずれかで占いをする。祟り鬼の名が分かったら、それを呪って厄払いをする。だれかに呪われると、呪詛返しをする。畢摩が主催する年中行事の中で、最も重要なのは松明祭りと新年（十ヶ月年）の祖先祭祀であろう。儀式の実態が分かるように、次に村祭りとは家庭でのまじないをそれぞれ一つ紹介する。

例 1. 雲南省禄豊県高峰郷大・小花箐村の松明祭り

(1) 松明祭りの由来

松明祭りは中国西南地区では彝族系の諸族（彝族、白族、哈尼族、傣族、拉祜族、納西族、阿昌族、基諾族）を中心にして行われている。彝族系の諸族と隣接して居住している一部の漢族、佤族などもその影響を受けて、松明祭りが行われている。

彝族はかつて自分の暦（十ヶ月）があり、松明祭りは各地でほとんど同じ日（旧暦の6月24日或いはその前後）に行われている。高峰郷の場合には、実際には24日に迎え火の行事をするが、村人たちはやはり25日—27日を祭りの日としている。貴州省の彝族は26日、雲南省の大理市当たりの白族は25日に行う。

松明祭りの由来は歴史がかなり古いと思う。『詩経・小雅・大田』は中国の西周（紀元前11世紀—前771年）の貴族が収穫の前に神様を祭る様子を記録した。そこに螟蟘、蝻賊という害虫から農作物を守り、神様に祈願する詩が残っている。その詩の一部分は次の通りである。

去其螟蟘	螟蟘を殺せ
及其蝻賊	蝻賊を殺せ
毋害我田穉	我が苗に害を与えないで
田祖有神	田の神、靈験を現してくれ
秉畀炎火	火を燃やして虫を焼いてしまおう
……	
来方禋祀	（曾孫が）来て四方を祭祀する
以其騂黑	黄牛と黒豚で
与其黍稷	新しく収穫する黍と高粱で
以享以祀	神様に供えて祭祀する

以介景福 神様に祈願して福を賜る

李鳳蓀が統計した中国の蝗害の記録によると、紀元前707年から1935年までの2642年間に796年も蝗の災害を被っているという⁹⁾。蝗の災害はそんなに頻繁に起きていた。中国では古来水旱蝗兵（水害、水飢饉、蝗、戦乱）が併称され、蝗は最もひどい災いの一つである。それで農業がなかった古代には、中国人はいろいろな害虫駆除法を発明した。松明祭りもその一つである。

旧暦の6月末はそろそろ稲の穂が出て、害虫が発生しやすい時期である。松明祭りの由来伝説を読むと、害虫撲滅と豊作の確保が祭りの主な目的である。次に昔の文献を引用して論じようとする。

清・『西昌県誌』夷族誌により、「…陰曆季夏六月二十四日、為俅族火把節。……行繞所耕種之田地間、且行且舞、以祈豐年。……雲南寧屬漢人亦偶有之。当其萬炬齊明、足以殺禾稼之害蟲、於農事頗有裨益」という。つまり、旧暦の6月24日は俅族（彝族）の松明祭りである。…田や畑を歩き回りながら、踊る。それで豊年を祈願する。雲南に住む漢族もたまには行う。松明を何万本も一斉に燃やすと、穀物の害虫を十分に殺すことができる。農耕にはかなり益がある。

清・『滇糸』雑載により、「火把節即星回節。六月二十五日、農民持炬照耀田間以祈年」という。それは、「松明祭りは即ち星回節である。6月25日に農民は松明を挙げて田を照らして豊年を祈願する」という意味である。

松明を挙げて、田畑を照らすのは害虫を駆除するためでもあるし、松明の燃え方でその年の豊凶を占うのでもある。この風習に関する記載は近世の地方誌¹⁰⁾にたくさん載っている。

松明祭りに関する伝説は地方や彝族の支系によりかなり違う。その伝説はいったいどれほどあるか、なかなか統計できない。伊藤清司はそれらの伝説のモチーフを祭祀型、抵抗型、征服型に分類してある¹¹⁾。

彝族が集中的に住んでいる涼山と彝族の撒尼人が住んでいる昆明の郊外では、次のような伝説が伝わっている。天神のエンティグツが税を納めるため、地上に使者を派遣したが、その使者は人間

に殺されたので、エンティグツは立腹して、人間界に害虫をたくさん撒き降ろし、それらの害虫は穀物を食べってしまった。人間は松明を燃やし、害虫を焼き殺して、豊作を守った。これは天上権力抵抗型伝説である。

しかし、雲南省禄豊県高峰郷大・小花箐村の松明祭りはいくつかの伝説が重なっているようだ。それを説明するために、まず祭りに使われた仮面神を説明する。

仮面神に仮装する資格がある人は背が高く体が丈夫な若者である。仮面は幅 40 センチ、長さ 60 センチある。そのパターンは 20 キロぐらいの石である。竹編みに紙を貼った仮面は村人の普順発と普友祥が作ったのである。黒い仮面神は彝族語でカンイボという。仮面に目が三つある。額にある目は鬼が見える。耳は小さい仮面でできています。仮面の上の帽子の部分には龍が書いてある。昔、土主廟にあった土主神だという。一方、『三国志』に載った孟獲だという人もいる。赤い仮面神は彝族語でツァスポという。仮面の帽子の部分に虎が書いてある。神話には洪水の後唯一に生き残った人間だから、祖先神だという。一方、関羽だという人もいる。白い仮面は彝族語でアムリという。帽子には八卦図が書いてある。天神だという。一方、諸葛孔明だという人もいる。畢摩普順発は、黒い仮面は土主神、赤い仮面は祖先神、白い仮面は天神だと言っている。仮面の開眼供養式に、「我らには孟獲を七回捕まえる兵隊がいる。虎ほど勇ましい孟良のような将軍がいる」と畢摩が唱える。その呪文から考えれば、黒い仮面は孟獲、赤い仮面は関羽、白い仮面は諸葛孔明だとも理解できる。それについては一つの伝説がある。三国時代蜀国の丞相（摂政）諸葛孔明は南中（雲南、貴州、四川の西南地方）を安定するために、楚雄で孟獲の兵隊と戦った。彝族の首領孟獲を七回捕まえて七回帰らせた。孟獲はその後誠心誠意に帰順し、彝族の人は松明を挙げて、孔明の蜀軍を迎えた。孔明は関羽の大刀の 72 種の使い方を現地の人に教えた。孟獲が死んだ後、農民たちは孟獲を記念するため、松明祭りを行って、大刀舞をしてきたという。

歴史では孔明は蜀漢建興三年（225 年）5 月に蜀軍を率いて、金沙江を渡って、雲南に進出し、彝族の首領孟獲と戦ったことがある。でも、一般的には自分の首領が戦争に負けて、彝族が松明を挙げて敵を迎えてくるのは理解しがたい。孔明は中国では文化英雄的な存在で、松明祭りは孔明の南中進出に由来するとは後世の付会であろう。一方、畢摩が各農家で魔除けの行事をする時に「お酒をご馳走する」経典を唱える。それには「土主神カンイボを祭る。人神ツァスポを祭る。天神アムリを祭る」という文がある。土主神、祖先神、天神はもっと古い信仰で、後世の人がそれに『三国志』の人物をくっつけたと推測されるのであろう。さて、祭りの実態を見てみよう。

（2）祭りの実態

大・小花箐村は省都の昆明から約 130 キロ離れている。村の標高は約 2000m 余りで、戸数は 88 戸で、人口は 450 人あまりいる。村は郷の役所から 2 キロ離れている。村から 20 キロ離れる黒井というところは漢の時代から塩の産地であるから、村の伝統的な生業は塩の運輸であった。今は、稲、トウモロコシ、小麦、タバコの栽培などは主な農作物で、牧畜は副業である。昔から、漢族の移民が入って、特に明代の初め、江西や南京からの兵士が村の「普」という苗字の家族に入り婿になり、村人はほとんど普姓で、多くは移民の子孫だと聞いている。現地の農民はほとんど漢語が通じる。

私は 1998 年にはじめて大・小花箐村の松明祭りを調査した。案内者の一人は祭りの司会である畢摩普順発の息子・普宜延（楚雄彝族自治州彝族劇団所属）である。普宜延によると、祭りは 3 年おきに行うことになっているそうだ。

松明祭りの行事を主催する畢摩は 3 人いる。主役は普順発である。彼は 1937 年生まれ、かつて人民公社の共産党の書記長を担任したことがある。大畢摩・普朝発の甥で、12 歳から畢摩の術を習った。村では人望が高い。1950 年代以降、長い間畢摩の術も松明祭りも迷信だと言われ、祭りは禁止されたことがある。畢摩が漢語の当て字

で記載された経典を唱えるということから見ると、彝族文字ができないようだ。祭りには盛大な旗チーム、楽器演奏チーム、刀舞チームなどがある。

旗チームには16歳未満の男の子が参加する。彼らは赤、黄色、緑の旗を30枚ぐらい持っている。顔には花模様が付いていない。

楽器演奏チームは銅鑼、太鼓、シンバル、トロンボーン、チャルメラなどで演奏する。その他、鉄の大砲（高さ20センチ、直径6センチの鉄桶のようなもの）を打ち上げる人もいる。

刀舞チームには大花箐村の村人は36人、小花箐村の村人は50人参加した。参加者は必ず偶数になっていて、顔には花模様がついている。刀の長さは40センチ、柄の長さは120センチある。

以上、女性は祭りを見学することができるが、参加してはいけな。20歳から40歳までの村の男性は顔を黒か白か赤か白黒に塗る。その他の男性は顔を塗る必要がない。

行事は次の順序にしたがって進む。

(1) 迎え火。6月24日（旧暦、以下同）村の農家は山羊や鶏を殺して祖先を供養する。夜、松明に火をつける。

(2) 開眼供養。25日、各農家の主人は土主廟に集まる。儀式用の道具もそこに揃えて置く。畢摩は仮面にお酒とお米と蠟燭を供える。手伝いの人は火で赤く焼いた犁の刃に酢をかけながら、仮面の周りを歩き回る。それを打酢湯といい、儀式が始まる前に、畢摩は必ずそれで全ての道具の穢れを祓う。その後、畢摩はお経を唱えながら左の脇の下に雄鶏を挟んで、右手で鶏の冠をつねり、その血を仮面の目、口、鼻、耳に垂らして開眼させる。開眼した後、鶏を放して、黒い山羊を一頭殺す。ここで大切なのは血のプラスの力である。彝族の社会では、私の見る限りでは、血が穢れのあるものだとは思われていないようだ。鶏の血で仮面を開眼した後、仮面は神聖なるものになり、それに勝手に触ったりしてはいけな。大事にすべきである。

(3) 鬼祓い。26日、仮面神と畢摩たちは両村の各家へ鬼祓いに行く。仮面神と畢摩は家に入る

直前に、主人側の人は玄関の外側にお線香を立て、爆竹を鳴らす。母屋の仮面神の供養棚にお酒や蚕豆などのものを供えておく。村人は鉄の大砲を3回打ち上げる。仮面神と畢摩は家に入ると、仮面は母屋の内側に並べられ、畢摩は『火把節祭経』を唱える。風邪鬼、リュウマチ鬼、眩暈鬼、咳鬼、牛を死なせる鬼、農作物を病気にする鬼、腹痛の鬼、子供を元気に育てない鬼などを数えて、仮面神の力でそれらの鬼を捕まえて、追い祓って、子孫の繁栄と家畜の繁殖と五穀の豊穰を祈る。最後に神様にお酒を供えて、鬼を追い祓う。鬼を縛る時、畢摩の補佐役は主婦の首に鉄の鎖を掛けた。主婦は体が弱くて、鬼が憑いていると思われるようだ。儀式が終わる際に、畢摩は「トゥ、トゥ」と叫んで、蚕豆を外側に蒔く。それは神様の兵士が乗る馬に餌を食べさせる意味である。また、畢摩は茶碗の水を飲んで、その水を噴き出す。最後に、茶碗を敷居の外側の地面に逆さに被る。それは鬼への食べ物もうなくて、今後来ないようにとの意味である。

(4) 松明舞。26日の夜、村の小学校の運動場で大人の男性は松明舞と刀の舞をする。男の子は旗を持ちながら歩き回る。

(5) 送り火。27日、みんなは村から火把（松明）山へ行って、山の斜面で何回も大刀舞をする。最後に鬼が憑いた例の仮面を山の頂上で焼いてしまう。村人はみんな仮面の紙を少し奪って持って帰る。子供が病気の時、その紙を焼いた灰を飲むと、病気が治り、その仮面を焼かないと、人に祟りをする恐れがあるそうだ。

(6) 夜、みんなで踊りをする。翌日になると、松明祭りが終わる。

大・小花箐村の松明祭りは普通の松明祭り比べると、違うところがいくつかある。祭りの中心になっているのは畢摩が各農家での厄払いと村人の刀舞だと思う。祭り全体から見れば、儼の性格が強いと岡部隆志も指摘している¹²⁾。儼の研究が進むことにしたがって、この祭りは中国でますます注目されてくると思われる。

彝族は火に対する信仰がとても強い。遊牧民であった彝族は火で獣を捕って、焼いて食べていた。

夜、火によって獣から命を守ってきた。後に農耕民として定着した後、長い間焼畑の畑作を生業として営んできた。畢摩が行事をする際、必ずまず火を燃やして、その煙で神様に行事の始まりを知らせ、神様を招いてくる。行事が進行していくと、火で焼いた石にお酢をかけて、その蒸気で全ての穢れを祓う。行事用の生贄は火で毛を焼いて、その穢れを祓う。人が死ぬと火葬する。死者の靈魂がその煙に従って天へ行く。また、囲炉裏は神聖に見られ、その上を跨ってはいけぬ。息子が別居すると、実家から新築の家に火の種を持っていく。家族の靈魂が逃げたと疑うと、まずその靈魂を囲炉裏に呼び戻してはじめて体に戻れると思われる。彝族の創世神話「勒俄特依」には洪水の後、祖先が最初に生まれた人はおしで、爆竹を囲炉裏に入れて鳴らすと、おしが話せるようになり、兄弟三人は彝族と漢族とチベット族の祖先になったという。火をそれほど信仰している彝族が松明祭りを大事にするのは当たり前のことである。それが松明祭りが長く存在した理由だと思う。彝族の松明祭りは火の信仰に由来すると思う。ただし、高峰郷の場合にはそれに天神、祖先神、土地神信仰と『三国志』の伝説が加わって、いくつかの要素が重なっていて、もっと複雑である。

例2. 呪詛返し

取材の日にち：2000年9月16日（西暦、丑の日）

取材地：四川省涼山彝族自治州美姑県都巴普鎮額其拉沖の自宅

取材に応じてくれた人：額其拉沖、県の計画出産局の公務員、30歳、4人家族。

呪詛返し儀礼の目的：呪詛返し（他の人に呪いをかけられたと思ったら、呪いを返さないと、自分に災いがやってくる。呪いを返したら、無事に生活できると思われている。普通は旧暦の7、8月に行う。）

畢摩：名前は曲比尔日、1968年生まれ。大畢摩曲比拉果の長男、17歳から単独で畢摩の仕事をするようになった。美姑県畢摩文化研究センターに所属。

儀礼の順番：

(1) 11時40分、儀礼が始まる。畢摩は岩草で草鬼（山羊に乗って山羊を食う鬼、馬に乗って馬を食う鬼など）と女鬼（鬼がたくさんいるというシンボル）との像を、畢摩の弟子は木の小枝で神枝などを作っている。神枝は陰と陽のセットになって、後に畢摩の左側に置き、畢摩のお守り神になる。依頼した家族の人は畢摩の左に、見物人の私たちは畢摩の右に座る。主人の家族は、男性は首に麻の糸と鶏の毛がついている糸が巻き締めである。女性は普通の糸だけ巻き締めである。儀式が終わる時、その糸を切って、生贄につけて連れて行くと、鬼との縁を切ったとの意味である。

(2) 手伝いは庭で焚き火をする。その煙で神様に儀式の始まりを知らせる。

(3) 打酢湯。家の母屋で焼いた熱い石にお酢をかけると、蒸気が立つ。それで儀式に使う道具、人間、家具、お酒の瓶などを清める。同時に畢摩は「除穢経」（穢れを祓う経）を唱える。

(4) 家族の男性は左手で、女性は右手で策に入った小さくて白い木切れを触る。家族の人を儀式に招いてくるとのことである。

(5) 畢摩は畢摩の歴史というお経を唱える。儀式が始まると、畢摩は必ず畢摩の守り神¹³⁾を招いて、その力を借りて、儀式の成功を祈願する。そのうちに敵という草鬼を送って、生費用の雄山羊¹⁴⁾の首に巻きつける。

(6) 11時55分、畢摩は家族の名前を神様に知らせる。

(7) 11時58分、畢摩は鬼への賄賂として金と銀のシンボルである白い小切れを撒く。

(8) 12時、畢摩は山神を招いて、神の系譜を唱える。

(9) 12時5分、畢摩は呪詛返しの経を唱える。この経は長くて、途中昼ご飯として畢摩はラーメンを食べた。12時23分、儀式再開。この辺、畢摩は各家系の居住地や家系の名前を唱えて、彼らがした悪業を全て呪い返す。また、神様を生贄のご馳走に招くという経を唱えた。つまり、畢摩はここでいくつかの経典を混ぜて唱えている。

(10) 12時45分、畢摩は悪業を祓う経を唱える。

(11) 12時55分、家族の人はしゃがんで、手

伝いの方は生贄用の雄山羊を挙げて、家族の頭の上を時計回しに7回回す。時計回しをしたら、悪い物を外に出して祓うことができる。逆に回ると、めでたいことがうちに回ってくるとの意味で、間違っただけとはいけない。その後、生贄用の子豚を袋から出して、同じく7回回す。最後に、生贄用の雄鶏を時計回しに9回回す。生贄を家族の頭の上を回した後、地面に降ろして、主人は細い木の枝で生贄を叩く。その後、手伝いの方は山羊、子豚を順番に殺す。畢摩はずっと経を唱える。

(12) 13時13分、畢摩は鬼を呪う経を唱える。同時に、畢摩は包丁で鶏の頭を乱暴に叩いて、殺す。鶏の背中の骨を切って、骨の断面から口で空気を吹き入れて、鶏の首を上を持ち上げると、「ググググ」と鳥の鳴き声がある。その鳴き声に合わせて周りの人はみんな「oho oho oho」と一斉に声を上げる。その声は鬼を祓ったとの意味で何回も繰り返す。

(13) 13時15分、畢摩は神や鬼に生贄を供える経を唱える。後に、鶏の起源を唱える。20分に、家族が全員しゃがんで、畢摩はその周りを回りながら、例の鶏の鳴き声をする。庭で手伝いの方は爆竹を鳴らす。

(14) 13時30分、手伝いの方は依頼主の庭で生贄を解体する。畢摩はその休憩時間に依頼主の義理の母に卵の占いをしあげた。その手順はまずおばあさんは卵を頭や体に何回も擦り、針で卵の上端に穴を開けて、そこに空気を吹き込む。畢摩はその卵を割り、水を入れたどんぶりに入れて、卵の形や色や泡で判断する。卵の殻で卵の黄身を崩して、殻を浮かべる。殻が水面に止まる方向で依頼者の靈魂が抜けたかどうかを判断する。その占いの結果は女の化けた鬼が憑いていて、おばあさんはリュウマチ病に罹っているという。

(15) 15時15分、儀式が再開する。畢摩は小さい鬼板の正面に犬、猫、鶏の鬼をかく。その裏面に右から左へ横に彝族語の呪文をかく。その呪文の意味は次の通り：「屋内の犬の鬼、出て行け。囲炉裏の鶏の鬼、出て行け。屋前と屋後の呪符¹⁵⁾を祓ってしまえ。屋前にいる子孫のない鬼、出て行け。水のように速く流していけ。とりあえずこ

こまで書く。」畢摩はその呪文を唱えながら、生贄の肺を、鬼板に書いた犬と鶏と猫鬼との頭に乗せる。また、白い塩、黒い塩、犬の毛、猫の毛、鍋洗い物などを少し取って、包んでから鬼板に締め、呪詛返しをする。

(16) 15時30分、お茶を供える経を唱える。昔は本当のお茶を神様に供えたそうだが、今回は肉のスープをお茶として神様に供えた。

(17) 15時45分、畢摩は手に「招魂鶏」を押さえながら、「招魂経」を唱えて、依頼者の家族の靈魂を招く。他の人は鶏の下の地面に熱い石を敷いて、鶏の頭に水をかける。その水が熱い石に落ちると、蒸気が立つ。その鶏は毛が黄色い雌鶏でなければならない。ここで面白いのは、創世神話の「勒俄特依」に出ている彝族の遷移の路線が歌われることと、手伝いの方が一人の草鬼を北西（鬼が北西の山谷に住んでいる）の小川の岸まで送ったことと、畢摩が「招魂鶏」を主人のマントに入れて主人がその鶏をマントで包んで室内のベッドの後ろに置くことである。

(18) 16時15分、みんなで山羊と鶏の肉を食べる。畢摩も食べる。

(19) 16時30分、畢摩は続いて呪文を唱える。お酒を口に飲んで、また嘔き出し、それで鬼を祓う。

(20) 16時35分、畢摩は草を折って（鬼の腰を折る意味）、それを鬼板に締めながら、速く走る神様に鬼を祓ってもらう経を唱える。

(21) 16時37分、畢摩は一人の草鬼を屋外に捨てて、周りの人は「oho oho oho」と叫ぶ。畢摩の弟子は炭火で庭に捨てた草鬼を焼く。畢摩はビールを鬼板に嘔き、周りの人は例のように一斉に声を挙げる。そんな叫び声を何回も繰り返す。

(22) 16時48分、家族の人は鬼板に唾を吐き（鬼を罵る意味）、またその鬼板を上着の袖口とズボンの裾に拭く（体に憑いた邪気を鬼板に移す）。

(23) 16時55分、畢摩は呪文を唱えながら、山羊の角を切り、その角で鬼を押し出す。

(24) 17時、家族の人々は首に巻きつけた糸を切り、畢摩はその糸を家族の頭の上で何回か回し、草鬼に締めて、邪気を連れて行ってもらう。

(25) 17時3分、鬼と絶縁の経を唱える。周りの人はまた一斉に声を挙げる。

(26) 17時18分、天井の草紐を降ろして、家族の人は一端を取って、畢摩も一端を取りながら、包丁で切り、切った紐を草鬼に締め付ける。手伝いの人は大きな鍋を畢摩の前に持ってきて、鶏と草鬼を持ち上げて、鍋の上を3回回し、草鬼を熱い鍋に入れる。蒸気が立つ。その鍋を門の外側の庭に逆さに被る。

(27) 17時25分、畢摩は呪文を唱えながら、経典、鈴、めどきの筒などを片付けて、帰りの準備をする。持って帰るお礼は、山羊の皮と頭、山羊の肉、雌鶏一羽、依頼者の礼金10元、見物人の私たち（工藤隆夫妻、張正軍）からの礼金50元などである。使い残った岩草は依頼者のうちに置いた。それは神様がうちにいるとの意味である。畢摩の後について同時に帰ってはいけないようで、私たちは少し待ってから宿に戻った。

この呪返しの儀礼は約7時間かかって、生贄は山羊一頭と子豚一頭と鶏一羽であった。それでも小さい規模の儀式だそうだ。実はその日の朝、同畢摩はお葬式に行ってきた。私たちも見に行った。その場で殺された牛は22頭もあった。また、17日に、神話の取材のため、私たちは美姑県拉木阿覚郷核馬村の大畢摩・的惹洛曲のうちに泊まった。彼は子牛を一頭殺してご馳走してくれて、夜中の12時ごろまで神話を歌ってくれた。それほど生贄として家畜を殺しているから、大規模な儀式はどれほど盛大なのであろう。

以上、畢摩の起源と後継ぎ及びその実態、神器と経典、祭祀の実例を紹介した。彝族は歴史的にはほとんど山に居住してきた遊牧民であり、生産水準が今でもかなり遅れている。彼らは自然現象と社会現象を科学的に解釈できなくて、神がそれらを支配すると信じ、畢摩は神と人間を結ぶ架け橋であり、人々は何か悪事や農業の凶作や人間か家畜の病気などの災害に遭われたら、畢摩に頼めば願い事が叶うと信じている。彝族の人生儀礼、年中行事、鬼祓いなど生活のいろいろな面におい

て畢摩が活躍しており、畢摩のことが分からないと、実に彝族の研究ができないほどである。

注釈

- 1) 1997年3月14日—19日、2000年9月16日—18日、四川省美姑県創世神話の調査をした；1998年8月13日—8月15日、2002年7月31日—8月5日、雲南省禄豊県高峰郷大・小花箐村で松明祭りの調査をした；1998年8月17、18日には、同省楚雄彝族自治州双柏県法脞郷小麦地冲村で「老虎笙」の調査をした；1999年3月24日—25日、雲南省楚雄彝族自治州大姚県曇花山で「挿花節」の調査をした；2006年3月1日、2日、雲南省弥勒県西一鎮紅万村で「火祭」の調査をした。
- 2) 左玉堂、陶学良編『畢摩文化論』、雲南人民出版社、1993年、pp.28, 37。
- 3) 曲木約質『涼山白彝曲木氏族世家』、雲南人民出版社、1993年、p.139。
- 4) 楚雄州の東部、昆明地域、曲靖地域の南、紅河州の北に分布した烏蛮。
- 5) 世襲の官爵を与えられた少数民族の酋長を土司という。
- 6) 巴莫阿依『彝族祖靈信仰研究』、四川民族出版社、1994年。
- 7) 工藤隆『四川省大涼山イ族創世神話調査記録』、大修館書店、2003年。
- 8) 人の紛争を仲裁したことがある祖先。
- 9) 李鳳藻『中国経済昆虫学』、新湖南報印刷服務部、1952年。
- 10) 『雲南通誌』（清・乾隆元年刻本）、『滇誌』（清・写本）、『雲南府誌』（清・康熙三十五年刻本）、『昆明陽州誌』（清・道光十九年刻本）など。
- 11) 伊藤清司『西南中国の火把節起源伝説』（『新嘗の研究3』、学生社、1988年。p.126）。
- 12) 岡部隆志『神話と自然宗教—中国雲南省少数民族の精神世界』、三弥井書店、2013年。
- 13) 家伝の畢摩なら、その畢摩の守り神は同時に祖先神でもある。
- 14) 鬼祓いには雄山羊、祖靈祭りには雄綿羊を用いる。
- 15) 他の人がこの家の屋前と屋後に埋めた呪いの札。

参考文献

1. 左玉堂、陶学良『畢摩文化論』、雲南人民出版社、1993年。
2. 曲木約質『涼山白彝曲木氏族世家』、雲南人民出版社、1993年。
3. 巴莫阿依『彝族祖靈信仰研究』、四川民族出版社、1994年。
4. 美姑彝族畢摩文化研究センター『美姑彝族畢摩調査研究』（印刷物）による。
5. 丁世良、趙放『中国地方誌民俗資料匯編』、北京図書館出版社、1997年。
6. 工藤隆『四川省大涼山イ族創世神話調査記録』、大修館書店、2003年。
7. 馮元蔚（訳）『勒俄特依』、中国国際広播出版社、2016年。